

茎葉処理剤及び粒剤の併用によるアザミウマの防除

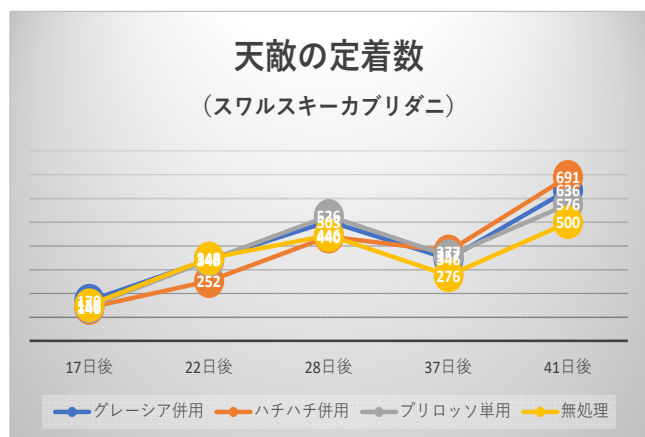
施設果菜類定植時における乳剤と粒剤の同時処理によるミナミキイロアザミウマに対する防除効果

背景・目的

- 果菜類栽培では、定植時、粒剤の植え穴処理が一般的に行われていますが、効果の発現までに数日要するため、ウイルス媒介虫の対策としては防除の空白期間が生じていることが心配されます。
- 一方、フルメタキサミド乳剤（商品名グレーシア）及びトルフェンピラド乳剤（同：ハチハチ乳剤）は、いずれもアザミウマに対して高い防除効果を有する茎葉処理剤ですが、天敵に長期間影響を与えることから、導入のタイミングについて明らかにすることが求められています。
- そこで、葉数が少ない定植時期に浸透移行性がないこれらの茎葉処理剤を粒剤と併用し、防除の空白期間をなくして、天敵利用につなげる防除の体系化を図ります。

成果の内容

- プリロツソ粒剤の定植時処理は、アザミウマ成虫に対して効果が見られますが、効果の発現に3日以上を要します。
- グレーシア乳剤の茎葉散布は、速やかに高い防除効果を発現し、キュウリ、ピーマンでは散布1日後に、ナスでは3日後に、成虫の寄生が認められません。
- ハチハチ乳剤の茎葉散布も同様に高い防除効果が認められますが、キュウリではやや遅効的、ナスではアザミウマ成虫数をゼロにはできません。
- 散布14～17日後に新展開葉にスワルスキーカブリダニを放飼し始めた場合、キュウリ、ピーマン及びナスいずれにおいても、茎葉処理剤の天敵への影響は認められず、体系的使用が可能です。



(図)：ミナミキイロアザミウマとスワルスキーカブリダニの推移（例：キュウリ）

成果の活用方法(又は期待される効果)

- 施設果菜類では定植時のウイルス病(黄化えそ病など)の対策を補完することができます。
- 普及対象地域・面積 県内全域

留意点

- グレーシア乳剤、ハチハチ乳剤は定植直後に散布します。天敵放飼時期や放飼後の散布は厳禁。

関連研究成果カード：令和元年後期 番号7、関連事業名：果菜類における難防除微小害虫に対する新たなICM技術の開発
研究期間：平成28年～30年